フィクショナル・イマジナリー・ミヤザキさん（イン・グリーンハイツ・井田）

牛島伸陽（熊本大学）

細く小さな坂を上った先を右に曲がると、イマジナリー・グリーンハイツ・井田
ここは生協管理物件
六畳間は本当に六畳間で、ベランダは備え付けの洗濯機だけ
風呂トイレは別じゃないので同じ、コンロは当然一口だけ
シンクは大きめの洗面器ぐらい小さくて、どうやって料理するんだろうって思う
近くにはいつも開いていない喫茶店、「コインランドリー」と書かれたコインランドリー
中学校や公民館や老人ホームがあるので朝は色々の声がしてかなり人の気配がある
ミヤザキさんはアレルギーがひどいので
ぴかぴかに晴れた日でも洗濯物は室内干しをするし、大抵は長袖の服を着ている
それとぼくはべつにすきなひとでもなんでもないから、という理由だそうでショーツもブラジャーもそのままに、物干し竿に無感動に二枚ずつ吊るしてあるので
どれにしようかな、とその日履く下着を選んでいる背中を見ることになる
ミヤザキさんは苗字の刺繍が入った高校のジャージの緑の短パンをよく部屋着にしていて
初めてここに来た時は上からスカートを履いて下から抜き取るように脱ぐ、あの女の子として育てられたひと特有の特殊スキルを目にしていたけれど

もういいかなと思って、と言って今はそのまま短パンを脱ぎ去ってからスカートを履くので、
それを少しだけ残念に思う
もっとフツウな苗字になりたいからちゃんとケッコンしたいと思ってるんだ、と言うので
まったくのひとごとのようにフウン、と返す
ミヤザキさんは二歳年上のいそがしい社会人のひとと交際しているようなので
日曜日の夜だけはグリーンハイツ・井田、三階角部屋には誰もいない
ミヤザキさんは長女で、一年前におかあさんと喧嘩し続けてしまい
家出をしてきたそうなので学費も家賃もぜんぶひとりで払う羽目になったそうなので
レトルトの中華丼をパックご飯にかけて食べながら、おいしくなーい、とよく言っている
ご機嫌な時はコンビニのカット野菜をパリパリ皿うどんの上に乗せておいしい、と食べている
冷蔵庫はだいたい空っぽで
たまに人からもらったらしい日本酒の瓶が横たわっている
繁枡と書かれたラベルは父親が飲んでいたものそのものであまりに見覚えのある
それほど暑くない夜はそれをコンビニのロックアイスのカップに注ぎながら
河川敷で飲んでいる
ミヤザキさんは強く生きているけれど飲みすぎるとほろほろ泣き上戸になり
扶養の壁なんてとうに越えているのに子どもみたいにもなる
ゴミ出しは行かないといけないので曜日もきちんと守る人なので
ラベルを剥がされたペットボトルがキッチンの背中に整列することになり、
それをなんだかかわいく思うぼくは
ミヤザキさんがゴミ出しに行く気配を感じて、薄っぺらい灰色の布団の中でもう一度目を瞑る

早朝、イマジナリー・グリーンハイツ・井田

ミヤザキさんが咳をこじらせて気管支炎にかかって一日じゅう寝込んでいるというので
一リットルのイオン・ウォーターとその他救援物資を持って行く、グリーンハイツ・井田
そういう周期も重なっていたら大変だろうな、と買っていった鉄分入りの紙パック飲むヨーグルトを見て
さすがに差し入れスキルが高すぎると褒められたので、これからも自信を持って生きていこうと思う
でもまさか今日泊っていくと思わなかったんだけど、なんで、どうしたの、と訊くので
うーん、なんとなく、暇だったから、と言う
ひまつぶし、ってことだ、都合がいいだけじゃん、と言うのであわててそんなことない、と
否定しながら、言い終わるころには気付く
ミヤザキさんはなんとなくぼくの回路が読めるから、それをころころ転がして楽しんでいる
むずかしいこと言うけど、実は何も考えてないから接しやすいんだよね、と言われた日から
飛躍する話題の間に的確な理由を見つけてくるミヤザキさんをぼくはすごいと思っている
夜中、イマジナリー・グリーンハイツ・井田
ひとりじゃなかなか眠れないから添い寝してほしいと言われたので素直にそうしたら
この布団って意外と広いんだねって一個の枕の上で柔らかく笑っていたことがある
しんどそうに激しく咳き込む背中をさすりながらミヤザキさんを寝かしつける

さかさで寝ているので、物干しラックから目の前に白黒サテン生地のショーツと萌黄色のブラジャーがぶらさがっているのを見ながら寝ることになり、北枕だと思う
お昼になったら、クーラーの風がよく当たる部屋の隅っこに座って本を読もうと思う
もういっそ一緒に住んじゃう？　と冗談で言ったら、家賃半分払ってくれるならわるくないね、と意外に言われたことがあって
二・五万円ぐらいかなあ、さすがに簡単には出せないなあ、と予想していたら一万四千円だそうで
この値段で飼えちゃうのも飼われちゃうのもなんか、お互いさすがにやばいね、ってなって
なんとなくうやむやになる

雨音を怖がって耳を塞いで縮こまっているミヤザキさんの頭を撫でながら
ここはなんでこんなに寝れるんだろう、と訊くと、わたしがいるからじゃない、と言う
外は大雨、イマジナリー・グリーンハイツ・井田
外に出れない雨なので結局おひるのあいだはずっと寝ている
ミヤザキさんの冷えた身体におおいかぶさると、大型犬みたいだねと言う
さすがに女もののシャンプーすぎる、と笑いながら頭を撫でてくれる
ミヤザキさんは小さな鏡を見ながら器用に前髪を自分で切り揃えてしまう
いきなり短く切ったのに驚いた半年前から色落ちがして茶色になった髪は
今でもゴムを外すとよく結べていたなあってくらい短いことを知っている
魚定食の食べ方がへたくそで、純喫茶のピザトーストが好きなことも知っている
針を刺したら風船みたいにぱちんと割れてしまいそうな鮮やかな胸の張りとおへそを覗き込んだらけっこう暗闇だったので顔をうずめてそっとぼくはミヤザキさんの形を認識する

おならみたいな音がして違うよ、知ってるよ、って笑ったこともおぼえている
関係として起こる快楽を、ぼくはここでぎりぎりと噛み締めている
イマジナリー・グリーンハイツ・井田

夕方には帰るグリーンハイツ・井田
このドア蹴破ろうと思えば蹴破れそうだよねってチャイムを押して笑っているけど
もし誰かがほんとうにけやぶってきたらどうしようかと思うとそれが今はいちばんこわい
階段をじぐざぐに下りて、坂を下りて、大学を抜けて、うちに帰る
昔の人が懐中時計を入れていた小さなポケットに貫った丸い合鍵を差し込んで無くさないようにする
ぼくはじょうずに生きていたいのでひとりでもぐっすり眠れるけれど
たまに眠れないときはヘッドフォンをしてベランダでお酒の缶を飲んだりもする
三日月の周りに大きな星がたくさん見えると、ミヤザキさんの眼が笑ってるみたいだと思い
安心して目を瞑り思いを飛ばす、イマジナリー・グリーンハイツ・井田
翌朝目を覚まして外に出あるいてもおそらくミヤザキさんはどこにもいないグリーンハイツ・井田もたぶんない
ミヤザキさんはみんながぼくの三分の一でも心配してくれればいいのに、とつぶやいていた
月みたいに瞳は鏡
ミヤザキさんとぼくは当然のように似ている
ぼくを映すミヤザキさんは現実の断片の総体で
これはフィクショナル、出来事は全部イマジナリーなもので
全然別な現実をぼくはあえてこうして形に残そうとする
足りないものしかないからこうして空想をしてあそぶ

これは現実では決してない、夢落ちでも決してない
繰り返しミヤザキさんは存在しない、この文字の上澄みに影ぐらいはあるか
もしれない
また青春１８きっぷで東京に行ったら、道中もしくはその行き先で出会える
かもしれない
なくてもいいこの言葉の粒を噛みしめながらどこかでぼくは探している
喉が乾いて痛いから、なんとなく今日も生きているらしい
ぼくがぼくを悼むためで、それは言い訳
誰も傷つけたくない、自慰行為は気もちがいいから仕方ない
むせ返る生活の匂い、汗の筋
今年もなぞるように、夏
ここはイマジナリー・グリーンハイツ・井田